声

僕は、全ては陽光(ひかり)の中に調和しうるものだと信じた。対立と闘争も、そして歴史さえも、結局は‘生活’という退屈な時以外の何物でもないと信じた。つまり人間には天国も地獄も触れることはできないという訳だ。とんだお笑い草ではないか。

お前は自由だと哲学者が言う。だが、あまり遠くへ行ってはいけないという条件で。全てを脱ぎ捨てた裸の実存とはこんな程度か。僕は感性だけを持って歩く。

全てを棄てて全き自然に帰れと逃亡者は言う。生命だ、と欲望が自らを弁護するために、権力の獲得のために立ち上がる。だが僕は文明を愛し、都市を愛する。

その時、西洋は持ち前の巧妙な嘘を取り出して、つまりは存在だ、と言った。また東洋はもっと見事な詭弁を用いて、つまり輪廻だ、と言った。

いくら説明しても無駄か。ソフィストでも何でも雇うがいい。

(1984.12.18)